

# ペトラルカの文体模倣論とそのキケロー派 論争への寄与

田 中 佳 佑

文芸論史上（あるいは芸術哲学史上）、北イタリアを中心とする15世紀末から17世紀初頭のヨーロッパの人文主義者をはっきりと二派に分けて争わせた事件として、単独の古典作家の文体のみを模倣するか複数の古典作家の文体を折衷して模倣するかを選択をめぐる論争がある。発端は、コルテージ（Paolo Cortesi, 1465-1510）の書くキケローを模した文体についてポリツィアーノ（Angelo Poliziano, 1454-94）がその皮相さと過剰さを指摘し、コルテージがそれに反論を試みたことであったが（c. 1485-91）、論争の局面の中で特に、ベンボ枢機卿（Pietro Bembo, 1470-1547）が散文の絶対的規範としてキケロー唯一人を推したことに對するジャンフランチェスコ・ピーコ（Gianfrancesco Pico della Mirandola, c. 1469-1533：ジョヴァンニ・ピーコの甥）の直接的反論とエラスムス（Desiderius Erasmus, c.1466-1536）の間接的揶揄とを強調して<sup>1)</sup>、この論争は「キケロー派論争」と呼ばれることがある。歴史的事件としての一連の論争の経過については、既にマクラフリンの指標的研究およびデラニーヴァとデュヴィックによる明快な解説があるものの<sup>2)</sup>、単独派（キケロー派）と折衷派と双方の主張動機や論争自体の意義は必ずしも明らかでない。本稿の目的は、その究明のための一準備として、両陣営の見解の源と論争の構造的要因とをペトラルカ（Francesco Petrarca, 1304-74）のうちに明示的に見出すことに在る。中世以来の漠然たるキケロー讃美の習慣に對し文献批判に基くキケロー理解という具体的道筋を初めて与えたのはペトラルカであり、この人以降の人文主義の方法を決定付けたという点で、両陣営の見解の源をこの人に遡及して求めることは無根拠ではない<sup>3)</sup>。そして両陣営が共通の祖師ペトラルカを如何にして己れの体系中に取込み理論武装していったか

を観察することが、この論争の意義を学説史に定着させるための有効な視座を提供するものとわたくしは考える。

検討の対象は、ペトラルカがボッカッチョ (Giovanni Boccaccio, 1313-75) に宛ててその模倣論を最も詳しく説明した書簡の一節、すなわち『親近書簡集』 (*Epistolae familiares*) XXIII. xix. 11-13 (1366年頃) である。以下に原文と拙訳を掲げる<sup>4)</sup>：

[...] curandum imitatori ut quod scribit simile non idem sit, eamque similitudinem talem esse oportere, non qualis est imaginis ad eum cuius imago est, que quo similior eo maior laus artificis, sed qualis filii ad patrem. In quibus cum magna sepe diversitas sit membrorum, umbra quedam et quem pictores nostri aerem vocant, qui in vultu inque oculis maxime cernitur, similitudinem illam facit, que statim viso filio, patris in memoriam nos reducat, cum tamen si res ad mensuram redeat, omnia sint diversa; sed est ibi nescio quid occultum quod hanc habeat vim. Sic et nobis providendum ut cum simile aliquid sit, multa sint dissimilia, et id ipsum simile lateat ne deprehendi possit nisi tacita mentis indagine, ut intelligi simile queat potiusquam dici. Utendum igitur ingenio alieno utendumque coloribus, abstinendum verbis; illa enim similitudo latet, hec eminent; illa poetas facit, hec simias. [...]

[...] 模倣をこととする者が気をつけるべき点は、そっくり同じものを作るのではなく類似のものを書くという点です。この類似性は、似ていれば似ているほど作者が褒められるというようなたぐいの、その像の主そっくりの像というわけではなく、むしろ息子が父親に似ているというようなたぐいの類似性でなくてはなりません。息子と父親では、部分部分はしばしば大きく異なっていますが、顔つきと目において最もよく識別されるところの或る種の影と、われわれの [同時代の] 画工連中が雰囲気 (aer) と呼ぶものが、[顔の造作の] それぞれの物を仔細に測ってみれば全てが違っている場合でさえも、息子を見て直ちに父親の外見をわれわれの記憶の中に喚び起こすというたぐいの類似性を作り出しているのです。そこには確かに、この [記憶へ喚起する] 力を持つ、隠されたいわく言い難い何

か (nescio quid) があります。このように、或る点が似ている場合は却って多くの点が似ていないということに、われわれは予め注意しておくべきです。類似は言い表されることよりもむしろ知解されることが出来るという仕方で、その類似自体は隠れており、心の沈黙裡の模索によらずしては把握できないのです。それゆえわれわれは、他人の資質 (ingenium) と文体 (color) をこそ身につけるべきであって、言辞 [の表面的模倣] は避けるべきです。前者の場合に類似は隠れています、後者の場合は表立ちます。前者の場合が詩人を生むのであり、後者の場合は物まね猿を生むだけです。[…]

### 1. 人間の模倣と個人の模倣との違い

そもそもこの手紙でペトルカが主題にしている「模倣」は、古代ギリシャで理論化された文芸的営為としての模倣とは趣が異なっている。先ずこの相違を確認しておきたい。

『オデュッセイア』を「人間生活のよき鑑 (kalon anthrōpinou biou katoptron)」と喩えたアルキダマースに端的に示されるとおり<sup>5)</sup>、古代ギリシャの叙事詩・劇詩が目指した模倣は、個々の行動の統一的連続から導かれる anthrōpinou bios (人間生活／人間的な生き方) の模倣であったと言って大過なかるう。しかしながら「人間生活」の模倣といふこの簡潔で限定的な文言が後代の文人によって再び語られるのは、管見に確認し得た限りでは17世紀前半といふかなり晩い時期の史料である<sup>6)</sup>。したがってペトルカと同時代の言葉遣いに、アリストテレスを頂点として古代ギリシャに確立していた文芸論の術語としての「模倣」を期待するのは無理である。この誤りはとりもなおさず、模倣についてのアリストテレスの理解が古代以来一度も断絶せずに継承され続けてきたと見なすに等しい。しかし事実はそうでなく、16世紀後半から相次いだ『詩学』の本格的 (自覚的) 翻訳と註解を経て、ようやく17世紀にその消化された簡潔な理解が示されたのである。因みにペトルカ自身は『詩学』の存在を知っていたが<sup>7)</sup>、味読し研究した形跡は無い。

むしろ序節に引用した手紙で話題にされている模倣とは、人間生活一般の再現すなわち蓋然性に則った行為の連鎖の組立てではなく、或る特定の理想化された個人の真似である。この意味での模倣は中世を通じて

培われてきたごく普通の行いであった。最も代表的な例は宗教上の理想像の模倣である。聖人伝のみならず、修道院年代誌を埋める歴代院長の凡百の功績録さえ、古代ギリシャの「人間生活」とは正反対に、非人間的な *mirabile* (驚異／奇蹟) を伴うだけ尊重され模範とされた。神は自らの選んだ特定の人物のみに *mirabile* を恵むのであり、その物語は常に特定の聖人の個人名と結びついている。そして人々は聖人の名そのものを聖句同様に唱えつつ、思い思いの聖人と同じ振舞いをしようと日々心がけた。その極致が敬虔主義運動の一環としての *imitatio Christi* と称する苦行である。かかる心性の土壌にあって、文芸における模倣もまた特定の個人の真似を目指したこと、手紙の中でペトラルカが文体＝個人様式への関心を明瞭に示していることは、伝統に忠実な成行きである。この事情はペトラルカの別の著作にも窺える。『医者を駁す』(*Contra medicum*) III. 125に「この人々 [=ギリシャ・ローマの古典詩人] は、貴殿に説明しようとしても無駄な驚嘆すべき文体によって、徳や、人間と自然の本性、そして一般に人間の成熟を扱ったのだ([...] *de virtutibus, de naturis hominum ac rerum omnium, atque omnino de perfectione humana, stilo mirabili et quem frustra tibi aperire moliar, tractaverunt*)」とあり<sup>8)</sup>、「驚嘆すべき文体 (*stilus mirabilis*)」という語によって、聖人のそれと類比的な、特定の個人に顕現する驚異が示されている。ただしペトラルカの謂う *milabile* において宗教的意味は希薄であり、それはむしろ個人の資質に対する讃嘆の念へと変貌している。『自分と他人の無知』(*De sui ipsius et multorum ignorantia*) V. 127で「かつて著述に携わった全ての人々の中でも、否その人々より前に、キケローにこそわたくしが驚嘆していることを告白する (*Ciceronem fateor me mirari inter, imo ante omnes, qui scripserunt unquam*)」と述べるとき<sup>9)</sup>、この「驚嘆する (*mirari*)」は宗教的意味を伴っていない。要するに、中世的観念としての「驚異」から個人の「資質 (*ingenium*)」への開眼が派生し、ルネサンス文芸において徐々にこの「資質」が批評言語として定着してゆくわけであるが、ペトラルカはそのちょうど境目に位置しているのである。手紙にあった「他人の資質と文体を身につけるべきである (*Utendum igitur ingenio alieno utendumque coloribus*)」という文句は、資質と文体とを並列的に、したがって連続的に把握するペトラルカの考えを示している。特に古典作家の資質には「人間と自然の本

性 (naturae hominum ac rerum omnium)」への洞察が具現していたとペトルルカは考えた。これも一般的思潮と重なる見解である。西欧の文芸論には、優れた作家によって自然は望ましい仕方ですべてに再現されているので優れた作家を真似ることが間接的に自然を再現することにもなる、という伝統的理解があった<sup>10)</sup>。さらに、場合によっては、偶然に満ちた不完全な自然が作家によって完全な(望ましい)在り方に補正されるという積極的意義を担った再現もある。ゼウクシスが複数の不完全な美女から各々の美点を抽出して単一の完全な女神像を制作したという話は古代から近代までの技術・芸術論に類出するトポスである。ペトルルカがその論を文体の真似に限定し、個人の資質に執着するのも、この人の与していた伝統的理解において作家の資質のうちに自然の再現が包括されていたからだ、と見るべきであろう。いまや「模倣」とは己れの採るべき文体＝個人様式の真似を意味することが明らかになった。これを踏まえ、手紙の所説を文体模倣論として観察しよう。

## 2. 言行不一致, その真意

手紙は「模倣をこととする者」を二種に区別していた。一方は「息子が父親に似ているというようなたぐいの類似性」を目指し、模範となる古典作家の「資質と文体」を模倣する「詩人」。他方は「似ていれば似ているほど作者が褒められるというようなたぐいの、その像の主そっくりの像」を目指し、模範となる古典作家の「言辞」を模倣する「物まね猿」である。ペトルルカがボッカッチョに勧めたのは前者たることであった。ここでのペトルルカの言葉は、しかしながら、実行と一致していない。「息子が父親に似ているというようなたぐいの類似性」を「像」と対置しつつ理想的な模倣の在り方に喩えたのはセネカであり<sup>11)</sup>、「物まね猿」を戒める手紙の中でほかならぬペトルルカその人がセネカの「言辞」を模倣する「物まね猿」となっているからである。

直接この箇所についての言及ではないが、ペトルルカが古典作家の言回しを自分のものにしてしまう傾向があったこと、さらにそれを明確に自覚していたことを、『親近書簡集』XXII. ii. 12-14に基いてセレンザが指摘している。そしてペトルルカとその後続の文人が「古典のテキストを現代におけるその反省への踏切り板として使うとき、この人々は、過

去を仔細に検討したり分類したりするよりも、過去を能動的に活用し組立てなおし解釈するという前近代的な伝統に参加している」と主張する。セレンザの謂う「前近代」とは具体的にはデカルト以前のことである。「ヘレニズム時代からデカルトの世代に至るまで、哲学を実践することは、一にかかって、註解を書くことを意味していた」。そしてペトルルカを典型とする文人による「模倣の過程は、前近代思想における解釈様式と緊密に結びついていた。或る作家を模倣することによって、ひとはその作家の考えを釈義し、ときには己れ自身の考えにしてしまう場合さえある。実際このようにして、ひとは註解をも同様に書いた」のだという<sup>12)</sup>。セレンザの見解をわれわれが問題にしている手紙にも当てはめるならば、ペトルルカがおそらく無自覚的にセネカの言辭を「活用」したことは同時代の哲学上の思考法に並行する行為として許容されねばならず、したがってくだんの手紙はペトルルカによるセネカの「註解」と見るべきだということになる。その限りで、ペトルルカの言行不一致が取るに足らない表面的な問題にすぎぬという見地は確保される。しかしなお、それではなぜ特にセネカを選んで「註解」ないし模倣するのかという点は依然として謎のまま残るであろう。つまり、ペトルルカの模倣を「前近代」的思考法の所産と断定するセレンザの前提が、模範の選択基準に関わる論点を見落とす結果を招いているのではないか。たんに註解という思考様式しか持たなかった人という意味でペトルルカを「前近代」の人と呼んでよいものかどうか、わたくしは疑わしく思う。

ペトルルカが別してセネカに傾倒した理由を知る術はもはや無いが、確実に言えるのは、ペトルルカが模倣を（その理想的な姿においては）知性の働きのと考えていたことである。「類似は言い表されることよりもむしろ知解されること（intelligi）が出来る」と手紙は述べている。模倣が猿真似に墮するのは「知解」を伴っていない場合のことであって、逆に模倣者が古典作家の「資質と文体」を「知解」している場合には、その言辭を全く同じように真似て使おうとも猿真似ではない<sup>13)</sup>。むしろ手紙では、やや舌足らずな感もあるセネカの元の言回し（註11参照）を、ペトルルカの「知解」に基いて詳しく敷衍してさえいる。『自分と他人の無知』IV. 43でペトルルカは次のように吐露する：「本当のところ諸々の学識文藻などというものは外から付け加わった飾りだ。それに対して理性こそが人間にとって本来的かつ固有の要素なのだ（Litere enim sunt

aduentitia ornamenta, ratio autem insita ipsiusque hominis pars est)』<sup>14)</sup>。この文言は一見矯激であるが、文芸の陶冶を外面的な事柄として直ちに棄て去るわけではなく、理性による正しい知解が伴ってこそ litterae は有意義となることを確認しているのである。ここでは、己れの言辞を古典の「註解」として正当化する権威依存的な態度よりも、理性に基き古典を筋道立って知解することのできる人間一般の可能性への自負のほうが際立っている。そしてこの自負には、「前近代」どころか、むしろ近代の一条条件たる「人間の尊厳」概念へと連なる、正しく知解する能力はあらゆる人間に均しく割当てられているはずだという確信が見出せる。この確信は幾許かデカルト的（したがってセレンザによれば近代的）でさえある。

「知解」を介した模倣対象への個人的な敬愛こそが、ペトラルカにとって模倣の必要条件であると同時に、模範選択の基準でもあったように思われる。時の隔たりを無視してキケローやセネカへ宛てた書簡群、「わが心」とアウグスティヌスとの対話篇 (*Secretum*) は、古典作家を歴史内存在として相対化する見地よりして初めて可能となるのであり、そこでは模範としての古典作家と模倣者としての「詩人」(opp. 「物まね猿」) との対等な関係が暗黙裡に自明視されている。この対等性は、模範-模倣者関係が敬愛ないし友情のような主観的感情に基く私的交流の締結であることを示す一方、模倣者が模範に従属するのではなく、むしろ模倣者とは潜勢態にある模範にほかならず、将来には模倣者もまた古典の列に伍するであろうという期待をも表している。このとき古典作家からの模範の選択は、将来そのように在らまほしい自分自身の姿という基準に照らしてなされるであろう。この点は不滅の名声への渴望という現れ方でペトラルカの諸々の創作活動を顕著に特徴付けていた。例えば俗語詩『凱旋』(*Trionfi*) の中で、ラウラは、ルクレティアやボルキアのように「その各々が一人でも名高い詩や物語に十分ふさわしいと思われる (ciascuna per sé pareva ben degna di poema chiarissimo e d'istoria)」<sup>15)</sup> 淑女たちの引率者として、すなわち古典に記録される婦徳の鑑たちと対等の現代人として登場する。かかるラウラをペトラルカは現代世界の「尊厳 (dignitate)」と呼ぶのである<sup>16)</sup>。要するに模範-模倣者関係とは、正確には現実態の模範と潜勢態の模範との関係であり、ともに模範という点で対等なのである<sup>17)</sup>。したがって手紙に謂う「詩人」

は、先立つ作家を模倣しつつ後進作家の模範になる、という力動的な在り方をとる。この対等性・同形性のことを、ペトラルカは手紙の中で「息子を見て直ちに父親の外見をわれわれの記憶の中に喚び起こすというたぐいの類似性」と呼んだのであった。しかしこの「類似性」には「いわく言い難い何か」が「隠され」ていると手紙はいう。この文言は何を意味するか。

### 3. Quid est nescio quid?

ペトラルカの手紙自体が一見するところ言行不一致で、誤解を生むような書き方をされていたことを前節で観察した。しかし後のキケロー派論争において、ペトラルカを共通の祖師とする文人たちを単独派（キケロー派）と折衷派の両陣営に分断させた遠因は、そのほかにも求められる。理想的な類似を説明するのに使われた「或る種の影」、「雰囲気」、「いわく言い難い何か」といった曖昧な表現がそれである。ここでの「いわく言い難い何か」とは、手紙によれば、模倣したものがわれわれの記憶の中に模倣されたものを喚起する力の働きのことである。その働きが如何なる形をとって現れるかが判然としないゆえにペトラルカはそれを曖昧な表現で説明したのであった。しかしここでは敢えてこの曖昧さを切分けよう。わたくしは、記憶への喚起が時間に沿って働くとき形式上の類似があり、記憶への喚起が空間の中で働くとき内容上の類似がある、と考える。

時間に沿った類似とは、言換えれば、不可逆的な継承である。ペトラルカがキケローを模倣することはあっても、その逆は無い。そこで、常により後の作家がより先の作家を模倣する場合、その模倣がどれだけ巧く出来るかは、より後の作家がより先の作家の書いた内容をどれだけ理解しているかに依ると仮定してみよう。すると容易に予想されるとおり、時間の経過につれてより先の作家の意図とそれを可能にした固有の状況・環境は消えてゆくから、より後の作家がより先の作家の書いた内容を理解するのは困難になる一方である。それでもなおこれを模倣と呼ぶならば、その根拠は、内容の理解とは別の事柄に求めるほかない。つまり仮定が誤っていたのである。実はその根拠とは、より先の作家の意図のような目に見えない内容ではなく、はっきりと目に見えるもの、すな



わち文体ないし書き方の類型である。ゆえに時間に沿った類似とは形式上の類似であるほかに、それを行うのは文体・類型の模倣だと結論される。これについては、ポリツィアーノに文体を批判されたコルテージによる反論の末尾が明瞭に説明している：「自分 [の人格] をキケローに似せて形成しようとした人が、模倣ゆえの名声を少しも得られなかったとしても、それでもなお、キケローを表現することを自分のために選び取ったという一点では称えられるでしょう (ut qui se ad Marcum Tullium effingendum contulerit, si minus aliquam imitandi gloriam assequatur, in eo tamen ornetur, quod illum sibi elegerit exprimendum)」<sup>18)</sup>。この「表現すること」とは、ポリツィアーノの「実際わたしはキケローではない。だがそれでも、思うにわたしはわたし自身を表現するだろう (Non enim sum Cicero. Me tamen ut opinor exprimo)」<sup>19)</sup>という言葉に対する当てつけである。デラニーヴァとデュヴィックは、meを直接目的語とする *exprimo* の再帰的用法は、ポリツィアーノのこの文句がおそらく初出ではないかと註している<sup>20)</sup>。その推定が妥当なら、模倣から出発して自己表現（表現一般ではない点に注意）という概念を明文化したポリツィアーノに対し、コルテージは「表現」を文体や書き方の同義語としか理解していなかったことになる。キケローのような生き方は不可能でもキケローのような書き方は可能だ、と言っているからである。

次に、空間の中で働く類似とは、前節で言及したペトルカの古代人宛書簡のように、時間の隔たりを故意に無視しながら同一地平上に並んで対峙している作家同士に認められる類似のことである。ペトルカが主張したように内容の「知解」がこの種の類似を成立させる条件である。この類似の特徴は対等性であって、それゆえ時間上の継承関係とは反対に、作家は互いに置換可能であると見ることが出来る。ここにおける模倣とは、模範となる作家の言回しを「知解」し、それを自分なりの書き方で敷衍することである。物事に対する考え方や感じ方を模範と共有している限り、それらを如何に書き表すかは模倣者の裁量次第であって、書き方まで統一して真似る必要はない。内容の「知解」を条件とする一方、書き方の形式に拘束を設けないという点で、この種の模倣は確かに自己表現へと近付く場合もあろう。ジャンフランチェスコ・ピーコはベンボに抗して言う：「[模範となる] 像が外界に客在しない場合、像を作

る人が誰であろうと、その人が精神の内に抱く像それ自体にしたがって、その像は作られるべきです (si nulla extat extrinsecus imago, ad eam ipsam imaginem quam mente gerit, quisquis ille factor fuerit, id ipsum fabricari necesse est)<sup>21)</sup>。類型的文体のような客観的に形を成して目に見える模範がなくとも、模倣者は自分自身の想念の内なる模範を模倣して、模倣者自身の手による像を作り出さねばならない、というのである。模倣者を模範の内発的再現者として積極的に意義付ける点がこの理論の核心であり、この点でこそ模倣者同士も、模範と模倣者も、同一地平上に並ぶ。

ペトラルカが曖昧なままに保留した「いわく言い難い何か」が上のよう  
に分析できるとすれば、形式主義（時間上の模倣）と内容主義（空間  
内の模倣）との対立を、キケロー派論争を理解するための構造として導  
入することが許されるであろう。

#### 4. 能力主義の擡頭

これまで観察してきたように、ペトラルカの模倣論は文体模倣論とし  
ての志向を明示しながらも、模範と模倣者との「類似性」の現れ方につ  
いては超論理的な曖昧さを残していた。フマローリはこの曖昧さを「心  
の沈黙裡の模索」という文言に関係付けて読者の直観的知解に対する作  
者の要請と解釈したが<sup>22)</sup>、われわれは「理性こそが人間にとって本来的  
かつ固有の要素なのだ」というペトラルカ自身の発言に帰って、超論理  
的な「いわく言い難い何か」を直観の彼岸に片付けず、「詩人」の力動  
的在り方を手がかりに、形式主義と内容主義との混在という構造で把握  
することにした。そこから明らかになったのは、ペトラルカの文体模倣  
論が、基本的には書き方の類型の踏襲を扱いながら、理解・読解を介し  
た古典文体の内発的再現をも含み込んでいるという多層性である。否、  
ペトラルカにとって先人の文体を知解し再現することは先人の言辞を  
そっくり用いることに即応していたから、これを「多層」的と捉える図  
式化はわれわれの読込みの限りで仮にそう呼ぶことが許されるだけであ  
る。ともあれペトラルカの「多層」性が、後のキケロー派論争を通じ対  
立的な姿をとって分岐した、と見るのが出来よう。この姿については  
既にコルテージとピーコを代表として瞥見した。しかしペトラルカに

あって均衡を保っていた両傾向が、なぜキケローの絶対視とそれへの反抗という極端な闘争の様態を呈するに至ったのであろうか。

それを識る鍵はエラスムス『キケロー派の対話』(*Dialogus Ciceronianus*, 1528)に見出される。三人の架空の登場人物のうち以下の引用<sup>23)</sup>で対話しているのは、エラスムス自身の代弁者たるブーレーフォルス(ギリシャ語で「助言者」という意味の名)と、ベンボがモデルとおぼしきノソポヌス(同じく「病苦」の意)の師弟である：

BVLEPHORVS. Age redibimus ad aliud scriptorum genus nostro seculo vicinius. Nam aliquot aetatibus videtur fuisse sepulta prorsus eloquentia, quae non ita pridem reuiuiscere coepit apud Italos, apud nos multo etiam serius. Itaque reflorescentis eloquentiae princeps apud Italos videtur fuisse Franciscus Petrarcha, sua aetate celebris ac magnus, nunc vix est in manibus ingenium ardens, magna rerum cognitio, nec mediocris eloquendi vis. NOSOPONVS. Fateor. Atqui est vbi desideres in eo linguae Latinae peritiam, et tota dictio respicit seculi prioris horrorem. Quis autem illum dicat Ciceronianum, qui ne affectarit quidem? BVL. Quid attinet igitur referre Blondum ac Boccatum, hoc inferiores tum in dicendi viribus, tum in Romani sermonis proprietate? [...]

ブーレーフォルス「ここは一つ、ぼくらの世代により近い他の著述家のことに話題を戻そうじゃないか。幾世代かを経て弁論(eloquentia)はすっかり葬り去られてしまったと思われるが、その再生がイタリア人のあいだで取組まれ始めたのはまださほど昔のことではなく、ぼくらのあいだではもっと最近のことだからだ。イタリア人のあいだで弁論を再び花開かせた人の筆頭は、その在世時から名高く偉大なフランチェスコ・ペトラルカだったと思われる。[この人の]燃えるような資質も、事物についての博大な知識も、凡庸ならぬ弁論の力も、現代には見出し難い。」——ノソポヌス「認めましょう。ただし先生がペトラルカのうちにラテン語の使いこなす技能を求められようとも、ペトラルカのあらゆる言回しに、先立つ世代の粗野無骨の風味が感じられますがね。いったいキケロー派のふりすらしなかった人のことを、誰がキケロー派と呼ぶでしょう

か。」——ブーレーフォルス「それじゃあ、まして弁舌の力においてもローマ風の言葉遣いの会得においても〔ペトラルカより〕劣っていたビヨンド [Flavio Biondo, 1388-1463] やボッカッチョに言及することは、何の意味があるかしら。[…]

ブーレーフォルスがペトラルカによる弁論の「再生 (reuiuiscere)」を称えるのに対し、ノソポヌスがペトラルカの言回しには中世の残滓を留めた無骨さがあると述べる点は、相反する歴史観の対立を物語っている。ペトラルカを近代最初の人と見るか中世末の人と見るかという問題は既にエラスムスによって示されていたのである。しかし注意しなければならないのは、ブーレーフォルスがペトラルカに後続する文人をペトラルカよりも「劣っていた」と断じ、ペトラルカのような資質の持主は「現代には見出し難い」とする明らかな頽廢史観に基いて発言していることである。これに対しノソポヌスには、ペトラルカのことを「キケロー派のふりすらしなかった人」と酷評するだけの地歩、蓄積されてきたキケロー風文体の研究成果への自負がある。要するにペトラルカを文芸史上に如何に位置付けるかという問題は、頽廢史観と進歩史観との対立、或る種の新旧論争へと繋がるのである。エラスムスの演出する作品とはいえ、この対話が当時の文人の見解を一定の程度で客観的に反映しているとすれば、史観の対立は、キケロー派論争における両陣営がかれらの共通の祖師を如何なる仕方で利用しようと試みたかについて、理解の緒を与えてくれる。

この引用部の前後長い範囲にわたり、ブーレーフォルスは古今の著名な文人をキケロー派として挙げ、ノソポヌスが難癖をつけてそれらを斥ける、という遣取りが続いている。中でもコルテージと論争したポリツィアーノについてノソポヌスは「アンジェロ [・ポリツィアーノ] がアンジェリカ 天使的知性を直截に有していたこと、自然の稀なる驚異だったことは認めましょう。この人が精神を傾注したいかなる種類の著述に関しても、その力量は認められて然るべきです。しかしキケロー風の語法に関しては、その力量が認められてはなりません (Fateor Angelum prorsus angelica fuisse mente, rarum naturae miraculum, ad quodcunque scripti genus applicaret animum, sed nihil ad phrasim Ciceronis, diuersis virtutibus suspiciendus est)」と評し、ノソポヌス - ベンボ自身の論敵

ジャンフランチェスコ・ピーコのことは「あまりに抹香くさい神学者です (nimium theologus est)」と一蹴する<sup>24)</sup>。異教徒風の言回しを認めず聖書式のラテン語に固執しているという意味である。かくして著名な文人たちがノソポヌスによって次々に排斥されてゆくが、「キケロー風の語法」に適っていないという判定は共通である。この「キケロー風の語法」が、ラテン語のたんなる「使いこなし技能 (peritia)」から峻別されるべき、或る規範を包含した形式であることがノソポヌスの言から読取られる。確かにこの男がポリツィアーノを「驚異 (miraculum)」とまで評した点は、既に第1節で見た mirabile 崇拜と等しい、個人の資質への高い評価として留意されてよからう。しかしそれでもなお、「キケロー風の語法」の絶対的な優越は個々の作家の資質を無効化する。おそらくノソポヌスにとってそれは、成熟した人文主義に相応しい弁論一般の美的理想を意味しているのである。これに対しプーレーフォルスが一貫して称揚するのは、「弁論の力 (eloquendi vis)」、 「弁舌の力 (dicendi vis)」、 「言葉遣いの会得 (sermonis proprietas)」といった実技であり、露骨な能力主義を表出している。だからこそノソポヌスによる「使いこなし技能」の排斥や、ポリツィアーノを評する際の「力量 (virtus)」へのわざとらしい言及は、相手の論点を逆手に取った皮肉な反論となり得ているのである。プーレーフォルスの一見単純な「再生」讃美の行間には、古代ローマの弁論において頂点に達した実技は「幾世代かを経て」衰えゆく一方であり、散発的に現れる「燃えるような資質」の持主によってしか「再生」され得ないという、諦念と期待の交錯した複雑な心理が窺える。かかる史観のもと、かれが弁論一般の形式よりも個々の作家の資質に重きを置き、能力の一元的評価へ傾いたことは当然であろう。

要するに闘争の焦点は、文人のあいだに現れ始めた能力主義に在るのではないか。ここで、形式の一般化・普遍化を志向するキケロー絶対主義は、圧制的権威というよりも、個人の能力主義に対する防波堤としての役割を担っている。その際、形式を顧慮せずラテン語の実技だけ無暗に熟達していた名人芸のひとつとしてペトラルカは描き出され、キケロー派にとってそれは超克すべき目標となる。対して折衷派はペトラルカに対し、弁論の力の源を古典から見つけ出して模範として具現化し、さらにそれを再現するという資質を見込む。しかし両者ともペトラルカ的能力を問題にしている点は変らない。つまり文体論の焦点が、形式主義と

内容主義の混在から、古典作家のみならず文人自身をも歴史内存在として客観視する動きを経て、能力主義容認の可否という段階に移っているのである。実は「キケロー風の語法」の模倣に対する揶揄は、既にクィンティリアヌス『弁論家教程』X. ii. 18にも書かれていた。見方によっては、キケロー絶対主義批判もまた古典復興の一環、中世以来の伝統と化していた漠然たるキケロー讃美に対するクィンティリアヌスの見地の再生にすぎぬと言えるかもしれない<sup>25)</sup>。にも拘らずエラスムスの戯作的対話が目新しく見えるのは、ルネサンス期に至って、日常語と全く異なる文章語を平生から駆使し尚かつその文筆能力がその人自身の社会的評価に直結してしまう人種すなわち humanist (文人) が新たに出現したことによるのではないか。そして、能力で評価される文人という在り方の典型を後世に示したのが、ペトルルカその人であった。

この点でマクラフリンの指摘は示唆に富む。その論旨は、15世紀における「韻文から散文への、そしてイタリア語からラテン語への転向は、両方ともペトルルカ革命の直接の結果だ」というものである。マクラフリンの考えでは、先ず、古代との懸隔を意識していなかったダンテ世代の著述家が、ラテン語に直結する文章語として俗語を無造作に把握し、『神曲』に代表されるラテン語ともイタリア語ともつかぬ雅俗混交の韻文を書いた。ところがペトルルカが初めて古代と現代との断絶を自覚し、この人以降の世代は自分らの日常語と全く異なる体系としてラテン語を研究することになったという。「ペトルルカ革命」とは、この詩人が晩年に至って俗語詩の制作を放棄する旨を公言しラテン語散文に没頭するようになった事態を指す。実際には死の直前まで俗語詩の推敲をペトルルカは重ね続けたが、ボッカッチョは師友の言を真に受けて自分の俗語詩制作をやめ、古典研究に全力を注いだ。そしてこの二人の転向がほかの文人にも影響したという<sup>26)</sup>。散文の興隆について、同時期のフランス俗語文芸からロマンス語圏へ波及していったデリマージュをマクラフリンが全く顧慮していない点は、「ペトルルカ革命」への過大評価の観無しとしない。しかしペトルルカが古代との断絶を反省したうえで意識的にラテン語散文の研究へ向ったとするなら、それは歴史内存在としての古典作家を客観の見地から相対化したうえで改めて己れの文体の模範に選び取ると同時に、己れ自身をも歴史内存在として把握し、その無力を自覚したわけである。ラテン語と俗語は連続していないこと、したがっ

て日常語としての俗語をラテン語同様に使って詩を制作する能力が自分には欠落しているということ、ダンテにはよく分からなかったこのことが、ペトルルカには分かったのである。そして俗語が文章語たり得るか否かを見極めるため、むしろ韻文よりも散文の研究、俗語のそれではなくラテン語のその研究に向ったのであった。

ペトルルカ自身の望みは、キケロー派と呼ばれることではなく、キケローの精神を実践することであった。『自分と他人の無知』V. 127で、キケローに「驚嘆するにつれて模倣するのではなく、むしろその反対 (nec tamen ut mirari, sic et imitari, cum potius in contrarium laborem [...])」だとペトルルカは断っている。「けれどもキケローに驚嘆することがキケロー派たることを意味するのならば、わたしはキケロー派なのであろう (Si mirari autem Ciceronem, hoc est ciceronianum esse, ciceronianus sum)<sup>27)</sup>。つまりキケローを高く評価するゆえに模倣するのではなく、キケローに似るよう努めて初めてキケローのよさが判る、と言うのである。そのことによって他人からキケロー派と呼ばれようと呼ばれまいと、文人自身にとってはどちらでも構わないのであった。しかし後世における能力主義の擡頭は、この闕達を許さない。ペトルルカにあっては未だ緊密な共存を確認できた後のキケロー派論争の対立点が、文芸にとって非本質的な能力主義により先鋭化を余儀なくされ、両者背反の相を呈するに至ったのである。

本稿は平成20年度科研費補助金（特別研究員奨励費20・11556）による成果の一部です。

#### 註

- 1) エラスムスの揶揄に関してはつとにブルクハルトが『イタリアのルネサンス文化』（1860年）で言及していたが、ブルクハルトは論争の性格を旧弊なキケロー崇拜に対する非難と見なしており、ローマ教会内部での文献学的キケロー主義の革新性を見落としている。またポリツィアーノ、コルテージ、ピーコら一連の論争の主役の名を挙げていない。もしもエラスムスの揶揄だけを切離して強調するのならば、それは一知半解の謗りを免れ得ないであろう。キケロー派論争が改めて認知されるようになったのはI. Scott, *Controversies over the Imitation of Cicero as a Model for Style*, New York: Columbia University Teachers College, 1910以来である。

- 2) M. L. McLaughlin, *Literary Imitation in the Italian Renaissance*, Oxford : Clarendon Press, 1995 ; “Introduction” in J. DellaNeva & B. Duvick, eds., *Ciceronian Controversies*, Cambridge MA : Harvard University Press, 2007, pp. vii-xxxix.
- 3) ベトラルカとその後のキケロー派論争との関係に本格的に言及した論としては、M. Fumaroli, *L' Age de l' éloquence*, Genève : Droz, 1980, pp. 77-88 が先駆的である。ここでフマローリが強調するのは、langue sacrée すなわちカトリックの公式言語として16世紀に確立する洗練されたラテン語が、ベトラルカに端を発するキケローら異教作家への傾倒を経て屈折的に成立したという点である。キケロー風文体 (Tullianus stylus) を中世の修道院文化とルネサンスの世俗化された教会文化との境界標と見るフマローリは、この文体の擁護者としてベトラルカからベンボ枢機卿に至る系譜を統一する。この見方から、コルテージに対するポリツィアーノの反論もまた「ローマ教会によるキケロー純粋主義の公式化」に対する「最初の抵抗」(ibid., p.81) と位置付けられ、あくまでフマローリはキケロー派論争の背景に、世俗化した宗教権力の拡大とそれに抵抗する litterae humaniores という図式を描き出すのである。確かに、異教風文化に傾斜するローマ教会への敬虔主義的反動は、‘Quid haec ad Christum?’ という標語に示されるとおり、16世紀の、特にアルプス以北の人文主義には顕著であった。しかしポリツィアーノやピッコはその世代に属していない。またこの人たちの古典研究もベトラルカの文献学なくしては成立し得なかったのであるから、ベトラルカとベンボの関係だけを強調すると一面的な観察に終る惧れがある。
- 4) 原文は Biblioteca Italiana 版に拠る。一部の訳語の選定に関し、忝くも大学院美学総合ゼミの中で大愛崇晴特別研究員から懇切なご教示を頂戴した。ただし無論、誤訳の責は田中のみに帰する。
- 5) アリストテレース『弁論術』1406b.
- 6) それは英国の詩人ジョンソン (Ben Jonson, 1572-1637) の『森』(Timber, 1641), 1912-17行である (下線田中) :

A Poet is that, which by the Greeks is call'd kat exocheen, o Poietees, a Marker, or a fainer : His Art, an Art of imitation, or faining ; expressing the life of man in fit measure, numbers, and harmony, according to Aristotle : From the word poiein, which signifies to make or fayne. Hence, hee is call'd a Poet, not hee which writeth in measure only ; but that fayneth and formeth a fable, and writes things like the Truth. [...]

詩人とは、ギリシャびとにより「衆に卓れしポイエーター」と呼ばれたるものにして／「作る人」乃至「偽る人」の義なり。そのわざは、模倣のわざ、偽りのわざ。／アリストテレースに違つて言えば、拍節と韻律と調和に適い、人間の生をば表し出だすわざ。／「作る」乃至「偽る」を意味するポイエインなる語よりして、かの者は／ポウエトと呼ぶる。



拍節のみ整えて書く者を詩人とは呼ばず。さにあらずして／物語を捏ね上げて形作る者、真実に似たる事どもを書く者をこそ、詩人とはいうべけれ。[…]

「人間の生」の表現という簡潔な説明をジョンソン以前に見出すのは難しい。この人の直前の世代から例を引くなら、イタリア人文主義の成果を十全に吸収しルネサンス詩学の教養を一身に体現したシドニ（Philip Sidney, 1554-86）の『詩の擁護』（*The Defence of Poesie*, 1595）さえ、模倣対象を多岐にわたって説明し、折衷的な文言に終始している。「詩とは […] 模倣のわざである。それはアリストテレスがミーメーシスなる語で呼称したものの、つまり再現、模造、比喩的に語り出すための描写のことだからである。教育し快を与える目的を持った、物語る絵である。これには一般に三つの種類がある (Poesie [...], is an Art of Imitation : for so Aristotle termeth it in the word mimesis, that is to say, a representing, counterfeiting, or figuring forth to speake Metaphorically. A speaking Picture, with this end to teach and delight. Of this have bene three generall kindes)」とシドニは述べ、(1)「思いも及ばぬ神の卓越の御業 (the unconceivable excellencies of God)」を模倣する詩、(2)「学問や道徳の問題を扱う (that deale with matters Philosophicall, either morall)」詩、(3)「教育し快を与えるための模倣を行うに最適の (they which most properly do imitate to teach & delight)」詩を挙げる。(1)の例にはダヴィデの詩篇など宗教的讃歌のたぐい、(2)の例にはルクレーティウス『自然論』やウエルギリウス『農耕詩』などが各々挙げられ、(3)がようやく劇詩一般である (Sidney, op. cit., London: Ponsonby, 1595, Not paginated)。シドニは各種の詩の効用に着眼し、その有用性を以て詩を弁護することが目的なので、生の模倣という一元的原理に詩を還元せず、むしろ異種の詩を取り混ぜて各々の美点を列挙するに留まる。この折衷ゆえに、アリストテレスが『詩学』1447bで明言した学問と詩の区別(学問的内容を韻律にのせて語ろうともそれは詩と呼べない)をこの人は無視することになり、その所謂「詩」が結局いかなる外延に限定される概念なのか明示されない。詩の自律に関わるこの点はジョンソンの1916行で言及される。さらに、シドニ以前の、16世紀イタリアの『詩学』註解者たちがアリストテレスの所説を一般に誤解したり不十分に理解していた点については、J. E. Spingarn, *A History of Literary Criticism in the Renaissance*, 2nd edition, New York: Columbia University Press, 1908, Part I, Chapter III を参照。

- 7) 『医者を駁す』(*Contra medicum*) III. 119に、「もしもそうでない場合は[=ムーサイが詩人に宿るのでない場合は]、どうも貴殿は見たことがないらしく、貴殿が理解したこともなければ理解し得べくもなかったとわたくしには判るあの『詩学』を、[...] アリストテレスは公表しなかったであろう (Quod nisi ita esset, nunquam Aristotiles, [...] librum de poetica edidisset,

- quem, ut auguror, non vidisti, ut scio, non intellexisti, nec intelligere potuisti)」という一文がある。いかにもペトラルカ自身は『詩学』を「見た」ことがあり、それがいたく自慢のような口吻である。しかしながら『詩学』からの直接的な引用はペトラルカの著作にも見当たらない。
- 8) D. Marsh, ed., *Petrarca: Invectives*, Cambridge MA: Harvard University Press, 2003, p.102.
  - 9) *Ibid.*, p. 332.
  - 10) Cf. Spingarn, *op. cit.*, p.132; R. Wittkower, “Imitation, Eclecticism, and Genius” in E. R. Wasserman, ed., *Aspects of the Eighteenth Century*, Baltimore: Johns Hopkins Press, 1965, pp.144-147.
  - 11) セネカ『道徳書簡集』LXXXIV. 8, 「きみには〔模範の文体に〕像の如くではなく息子の如く似ていてほしい。像は生気の無いものだから (similem esse te volo quomodo filium, non quomodo imaginem; imago res mortua est)」。原文は Loeb 古典叢書版に拠る。
  - 12) C. S. Celenza, “Petrarch, Latin, and Italian Renaissance Latinity” in *Journal of Medieval and Early Modern Studies*, 35: 3, Fall 2005, pp.514-515.
  - 13) Cf. McLaughlin, *op. cit.*, p. 28.
  - 14) Marsh, ed., *op. cit.*, p. 260.
  - 15) “Triumphus Mortis” I. 17-18, in *Rime, Trionfi e poesie latine*, a cura di F. Neri et alii, Milano: Ricciardi, 1951.
  - 16) *Ibid.*, I. 141. キケロー『義務について』I. xxxvi. 130以来, dignitas (度胸)とは男性固有の美質であり女性固有の美質は *venustus* (愛嬌)であるとされてきた。対してペトラルカが男性のものとされていた *dignitas* をラウラに帰属させたことは、これをただの積極的性差でなく人間一般の「尊厳」と考えていたことを示す。人間の尊厳という概念の成立史上注目すべき用例である。
  - 17) この辺りのわたくしの立論は、「創造的模倣 [*imitation créatrice*]」が「二つの人間的才能すなわち実践行為における才能と潜在能力における才能との対決」であるというフマローリの図式的説明 (Fumaroli, *op. cit.*, p.79) に着想を得ながら、それを模範と模倣者との関係に置換えている。
  - 18) DellaNeva & Duvick, eds., *op. cit.*, p.14.
  - 19) *Ibid.*, p. 2.
  - 20) *Ibid.*, p. 234, n8.
  - 21) *Ibid.*, p. 96.
  - 22) Fumaroli, *op. cit.*, p. 79.
  - 23) P. Mesnard, ed., *Dialogus Ciceronianus in Desiderii Erasmi opera omnia*, I - 2, Amsterdam: North Holland Publishing Company, 1971, p. 661.
  - 24) *Ibid.*, p.664.
  - 25) ポリツィアーノのコレテージ宛書簡 (DellaNeva & Duvick, eds., *op. cit.*, p.2), 「自らの言葉の節目を『であると思われる』で区切るからといって自

- 分をキケローの兄弟だと思いなしていた人々は、クィンティリアーヌスによって嗤いものにされた (Ridentur a Quintiliano qui se germanos Ciceronis putabant esse, quod his verbis periodum clauderent: esse videatur) ;クィンティリアーヌス『弁論家教程』X. ii. 18, 『『であると思われる』という語句を文末に置きさえすれば自分はあの弁論にかけて神の如き人物 [=キケロー] の所産を美しく表現しているのだ、と自分勝手に思いなしていた人々を、かつてわたしは知っていた (Noveram quosdam qui se pulchre expressisse genus illud caelestis huius in dicendo viri sibi viderentur si in clausula posuissent 'esse videatur')』。原文は Loeb 古典叢書版。エラスムスの『対話』では、プーレーフォルスがこの語法をしつこく使い、ノソボヌスも話頭に Fateor を連発する。ともにキケローのパロディ。
- 26) M. L. McLaughlin, "Humanism and Italian Literature" in J. Kraye, ed., *The Cambridge Companion to Renaissance Humanism*, Cambridge: Cambridge University Press, 1996, pp.224-229.
- 27) Marsh, ed., op. cit., p. 332.

拙稿「フィチーノ『神的狂気について』(1457年) 翻訳と註解」所収本誌196号の訂正

	誤	正
112 (155) 頁, 7 行目	「一つもの」	→ 「一つのもの」
103 (164) 頁, 25 行目	「『モラリア』」	→ 「『モーラーリア』」
101 (166) 頁, 21 行目	「114-118 頁」	→ 「131-135 頁」